

サルデーニャ語カンピダーノ方言における第 2・第 3 変化動詞の 直説法半過去語尾の形成について*

Sulla formazione delle desinenze dell'indicativo imperfetto della 2^a e 3^a coniugazione nel sardo campidanese

金澤 雄介

Yusuke KANAZAWA

1. はじめに

現代サルデーニャ語の第 2・第 3 変化動詞の直説法半過去は共通の語尾を持つ。本研究では、サルデーニャ語方言の 1 つであるカンピダーノ方言において、両活用タイプが合流にいたった過程について考察する。また古カンピダーノ方言の第 2 変化動詞には 3 種類の語尾、すなわち *ea* を含むタイプ、*ia* を含むタイプ、母音連続 *ea* の *a* が消失したタイプが観察される。本研究ではこれらの語尾の形成過程について、古カンピダーノ方言で書かれた文献である *Carte Volgari* に実際に現れる語形に基づき考察をおこなう。結論として、現代カンピダーノ方言の第 2・第 3 変化動詞の直説法半過去では、単数と 3 人称複数の語尾は *ia* を含むタイプおよび第 3 変化動詞のものを継承しており、1・2 人称複数語尾は母音連続 *ea* の *a* が消失したタイプに由来することを示す。

2. 考察に向けての前提知識の導入

本章では、本稿における考察に必要な前提知識について述べる。

2.1. 先行研究

サルデーニャ語には大別して 2 つの方言がある。サルデーニャ島の南端に位置する州都カリアリ (Cagliari) を中心としたカンピダーノ平野で話されるカンピダーノ方言 (campidanese) と、島の中央部および北部で話されるログドローロ方言 (logudorese) である。現代カンピダーノ方言の直説法半過去のパラダイムは Blasco Ferrer (1994: 156) や Corda (1989: 35, 40) などによって記述されている。古サルデーニャ語における直説法半過去のパラダイムは Wagner (1938-1939: XV. 1) や金澤 (2011: 142, 149, 162) で、とりわけ *Carte Volgari* における事例については Guarnerio (1906: 224) で提示されている。しかしながらそれぞれの人称語尾がラテン語からの

変遷においてどのような変化をこうむったかという問題については, Blasco Ferrer (1984: 103) に第 2・第 3 変化動詞はひとつの活用タイプに合流したという言及はあるものの, 各人称語尾に生じた変化について詳細な分析はおこなわれていない. とりわけ古カンピダーノ方言から現代カンピダーノ方言にいたるまでの変化についてはまだ明らかにされていないことが多い.

2.2. *Carte Volgari* について

Carte Volgari (以下 CV) は, カリアリ国¹の歴代の王 (Giudice) からカリアリ大司教管区 (Arcivescovado di Cagliari), あるいはカリアリ北部に存在したスエッリ司教管区 (Vescovado di Suelli) に対する財産, 土地などの寄進を記録した文書の総称である. 1070 年から 1226 年にかけての文書が残存しており, 計 21 編からなる. Solmi (1905) によると, それぞれのテキストが書かれた年代は以下の通りである: 1: 1070-1080 年, 2: 1114-1120 年, 3: 1114-1120 年, 4: 1121-1129 年, 5: 1130 年頃, 6: 1130 年頃, 7: 1140 年頃, 8: 1150 年頃, 9: 1200-1212 年, 10: 1200-1212 年, 11: 1215 年, 12: 1215 年, 13: 1215 年, 14: 1215 年, 15: 1216 年, 16: 1217 年, 17: 1217 年, 18: 1217 年, 19: 1225 年, 20: 1226 年, 21: 1226 年. 本稿では CV のテキストとして, Solmi (1905) を使用する.

CV を構成する 21 編のうち 16 編はオリジナルが残されている. 一方残りの 5 編, すなわちテキスト番号 1, 7, 15, 20, 21 は, 15 世紀以降の写本のみが現存している.

2.3. ラテン語の直説法半過去語尾

サルデーニャ語の第 2 変化動詞は, ラテン語の第 II 変化動詞 (INF. -ĒRE) と第 III 変化動詞 (INF. -ĒRE) の合流の結果生じた活用タイプである (Wagner 1938-1939: 137). 一方第 3 変化動詞はラテン語の第 IV 変化動詞 (INF. -ĪRE) を継承している. 以下にラテン語の第 II・第 III・第 IV 変化動詞の直説法半過去のパラダイムを示す.

	第 II 変化動詞	第 III 変化動詞	第 IV 変化動詞 ²
INF.	VIDĒRE 'see'	VĒNDĒRE 'sell'	DORMĪRE 'sleep'
1SG.	VIDĒBAM	VĒNDĒBAM	DORMĪBAM
2SG.	VIDĒBĀS	VĒNDĒBĀS	DORMĪBĀS
3SG.	VIDĒBAT	VĒNDĒBAT	DORMĪBAT
1PL.	VIDĒBĀMUS	VĒNDĒBĀMUS	DORMĪBĀMUS
2PL.	VIDĒBĀTIS	VĒNDĒBĀTIS	DORMĪBĀTIS
3PL.	VIDĒBANT	VĒNDĒBANT	DORMĪBANT

3. 考察

本章では、古カンピダーノ方言における第 2・第 3 変化動詞の直説法半過去に見られる 3 種類の語尾の形成過程について議論する。そして現代カンピダーノ方言のそれぞれの人称語尾がどのタイプの語尾を継承しているかという問題について考察をおこなう³。

3.1. 古カンピダーノ方言の直説法半過去語尾

古カンピダーノ方言の直説法半過去語尾には、以下のような形式が観察される。点線の箇所はその人称語尾が CV において文証されないことを意味する。

1SG.	-ea, -ia	1PL.	-----
2SG.	-----	2PL.	-----
3SG.	-eat, -iat, -eda	3PL.	-eant, -iant, -enta

上に示した表では、ea を持つタイプ、ia を持つタイプ、そして母音間の b の消失によって生じた母音連続 ea のうち、a が消失したタイプの 3 種類が見られる。以下では、それぞれのタイプの歴史的な形成過程について議論する。

3.1.1. ea を含むタイプ

ea を含むタイプには、以下のような例が観察される。

<i>et</i>	<i>ca</i>	<i>mi</i>	<i>pareda</i>	<i>pagu</i>	<i>custa</i>	<i>domestia,</i>	<i>de</i>	<i>no</i>
and	because	me.DAT.	seem.IND.IMPF.3SG.	little	this	land	of	not
<i>mi</i>	<i>bastari</i>	<i>ad</i>	<i>fagiri</i>	<i>binia</i>	<i>cantu</i>	<i>bolea</i>	(< VOLĒBAM)	
me.DAT.	be-enough.INF.	for	make.INF.	vineyard	as-much-as	want.IND.IMPF.1SG.		
<i>fairi</i>	<i>ad</i>	<i>sanctu</i>	<i>Jorgi</i>	(17) ⁴				
make.INF.	for	St.	J.					

「そしてこの土地は、St. Jorgi 修道院のために私がぶどう畑を作ろうと欲する分には少なく見えたので」

その他の用例

1SG. *aea* (9, 17) ‘have’ < HABĒBAM, *kerea* (17) ‘want’ < QUAERĒBAM, *tenea* (16) ‘have’ < TENĒBAM

3SG. **habeat** (12v), **abeat** (13), **aeat** (9) ‘have’ < HABĒBAT

3PL. **habeant** (3) ‘have’ < HABĒBANT

上記の語尾に含まれる母音連続 *ea* は母音間の *b* の消失によって導くことができる⁵。一方ラテン語の段階で存在した本来的な母音連続 *ea* は異化によって *ia* になる : *mia* (1, 2v, 5iii ecc.) ‘my’ < MEA. この事実から、母音間の *b* が消失する前に、母音連続の異化 *ea* > *ia* はすでに完了していたといえる。

3.1.2. *ia* を含むタイプ

ia を含むタイプには以下の例が観察される。

et naredimi k'ant essiri suas custas terras,
and say.PF.3SG.-me.DAT. that-have.IND.PRES.3PL. be.INF. his these lands
ki aia (< HABĒBAM) *comporadas ad Mariani de Franca su serbu* (17)
REL. have.IND.IMPF.1SG buy.PPASS. from M. de F. the slave

「そして彼は、私が奴隷 *Mariani de Franca* から買ったこれらの土地は、彼のものになるだろうと私に言った」

その他の用例

3SG. **auiat** (15iii) ‘have’ < HABĒBAT

3PL. **aiant** (3) ‘have’ < HABĒBANT

前節で、母音連続の異化 *ea* > *ia* はすでに完了していたと述べた。それにもかかわらず上に示した例では母音間の *b* の消失によって生じた母音連続 *ea* が *ia* に変化している。このような、音変化では説明できない *ia* を含むタイプについては、Wagner (1938-1939: 2-3) や Blasco Ferrer (1984: 103) なども述べているように、第 3 変化動詞からの類推が生じたと考えられる。古カンピダーノ方言における第 3 変化動詞の直説法半過去には、以下のような例がある。

et serbiant (< SERVIBANT) *illi in terra et in mari per tota*
and serve.IND.IMPF.3PL. them.DAT. in land and in sea for all
sa Sardinia in serbiciu cale aet boler
the S. in service REL. have.IND.PRES.3SG. want.INF.

s'archiepiscobu ki aet esser in s'archiepiscobu (1)
 the-archbishop REL. have.IND.PRES.3SG be.INF. in the-archbishop

「そして彼らはサルデーニャ全体のために、陸と海において、権限を有するであろう大司教が望むであろう奉公をおこなっていた」

その他の用例

3PL. *asserbiant* (1) ‘enslave’ < *ad servībant (GSA: 48), *seruiant* (1) ‘serve’ < SERVĪBANT

第 3 変化動詞の実例は 3 人称複数しか観察されなかったが、対応するラテン語の形式を考慮すると、母音間の b の消失によって 1SG *-ia (< -IBAM), 3SG *-iat (< -IBAT) が仮定され、これらの語尾から第 2 変化動詞に類推が生じたと推定できる。

ここで着目したいのは、古カンピダーノ方言で二次的な ea に異化が生じるのは、助動詞としての機能も持つ INF. *airi* ‘have’ (< HABĒRE) の活用形式のみであるということである。この事実に加えて、助動詞のような使用頻度の高い語では早い割合で音変化が生じるという Bybee (2005: 615) の見方を考慮に入れると、二次的な母音連続 ea にも再び異化が生じたと考えることも可能である⁶。

第 3 変化動詞からの類推の影響であれ、二次的な母音連続 ea における異化の影響であれ、ia を含むタイプが観察されることから、古カンピダーノ方言において第 2 変化動詞と第 3 変化動詞の直説法半過去語尾の合流は、部分的にはあるがすでに生じていたといえる。

3.1.3. 母音連続 ea に含まれる a が消失したタイプ

母音連続 ea に含まれる a が消失したタイプには以下の例がある。

et omnia cantu si pertineda (< PERTENĒBAT) a icussa domu (13)
 and every as-much-as RIFL. belong.IND.IMPF.3SG to this house

「そしてこの家にあったすべてのもの」

その他の用例

3SG. *abeda* (14), *aeda* (13xix, 14viii, 16ii, 17ix) ‘have’ < HABĒBAT *arreedā* (14, 16) ‘govern’ < *ad + regēbat (DES II: 345), *bineda* (9, 13, 17) ‘come’ < *benebat ← VENĪBAT⁷, *debeda* (13) ‘must’ < DĒBĒBAT, *pareda* (17) ‘seem’ < PĀRĒBAT, *pertineda* (11, 13, 14) ‘belong’ < PERTENĒBAT, *seeda* (16) ‘sit’ < SEDEBAT

3PL. *abenta* (9, 14), *aenta* (13iii, 16ii, 17ii) ‘have’ < HABĒBANT, *fagenta* (1, 18, 21) ‘make’ < FACĒBANT, *kerenta* (14) ‘want’ < QUAERĒBANT, *ponenta* (13) ‘donate’ < PŌNĒBANT

上に示した例では、母音間の *b* の消失によって生じた母音連続 *ea* に含まれる *a* が消失している。カンピダーノ方言では子音の消失によって生じた異なる母音の連続において、アクセントのある母音が保存され、アクセントのない母音が消失するという現象が観察される (Viridis 1978: 36-37, Wagner 1984: 85-86): *lóri* ‘cereal’ < **laóri* < LABŌREM, *sóri* ‘sweat’ < **suóre* < SUDŌREM, *póni* ‘peacock’ < **paóne* < PAVŌNEM. 古カンピダーノ方言では次のような母音の消失の例が確認された: *emus* (18) ‘have’ (IND.PRES.1PL.) < **aémus* < HABĒMUS.

母音連続 *ea* に含まれる *a* が消失したタイプでは、語末添加母音の付加が見られる。現代サルデーニャ語では、子音で終わる語が文末に置かれる場合、語末添加母音が付加される⁸。現代カンピダーノ方言では、直前の音節の母音が *a* の場合は [a] が、*e* および *i* の場合は [i] が、*o* および *u* の場合は [u] が付加される (Viridis 1978: 40)。以下に対応するラテン語とともに例を挙げる。

<i>sánguini</i> [i]	‘blood’	SANGUEN
<i>ést</i> [i]	‘be’ (IND.PRES.3SG.)	EST
<i>kuáttur</i> [u]	‘4’	QUATTUOR
<i>kántað</i> [a]	‘sing’ (IND.PRES.3SG.)	CANTAT
<i>kráz</i> [a]	‘tomorrow’	CRĀS
<i>kántaz</i> [a]	‘sing’ (IND.PRES.2SG.)	CANTĀS

母音連続 *ea* に含まれる *a* の消失は、語末添加母音が付加された形式に限られる。逆に 3.1.1. で示したように、語末添加母音を欠くすべての形式では *ea* が保存されている。本稿ではこの事実に対して、アクセントとの関連から考察を試みる。

3SG. *-eat* に語末添加母音が付加されると、音節数が 1 つ増えてアクセントは前次末音節に置かれることになる。その後、母音連続 *ea* における *a* が消失するとアクセントは次末音節に置かれることになる。サルデーニャ語のアクセント規則⁹から見れば、次末音節アクセントは許容される。3SG. *-eda* および 3PL. *-enta* の成立過程をアクセント位置を明示して示せば、以下のようになる。

3SG. -EBAT > -éat > *-éat[a] > *-ét[a] > -éd[a]

3PL. -EBANT > -éant > *-éant[a] > -ént[a]

一方、仮に語末添加母音が付加されていない形式で母音の消失が生じると、アクセントは語末音節に置かれることになる。サルデーニャ語では代名詞や接続詞など、ごくわずかな例外を除いて語末音節アクセントは存在しない (Wagner 1984: 25)。したがって語末添加母音が付加されない形式では母音の消失は生じなかったといえる。言い換えれば、3SG. -eda と 3PL. -enta において語末添加母音は母音連続に含まれる a の消失を条件付ける要素となっている¹⁰。

3.2. 現代カンピダーノ方言の直説法半過去語尾

現代カンピダーノ方言の第 2・3 変化動詞の直説法半過去語尾では、単数と 3 人称複数では ia を含むタイプが、1・2 人称複数では母音連続 ea の a が消失したタイプが継承されている。その結果両活用タイプの直説法半過去は完全に合流し、共通の語尾を持つ。なお、3.1.2. で示した、二次的な ea に再び異化が生じたという見方にしたがえば、現代カンピダーノ方言において異化 ea > ia が airi 以外の動詞にも生じたということになる。以下にそれぞれのパラダイムを示す (Blasco Ferrer 1994: 156 を一部修正)。

	第 2 変化動詞		第 3 変化動詞
INF.	bí 'see'	béndi 'sell'	dromí 'sleep'
1SG.	bía	bendía	dromía
2SG.	bías	bendías	dromías
3SG.	bíat	bendíat	dromíat
1PL.	biémus	bendémus	dromémus
2PL.	biéstitis ¹¹	bendéstitis	droméstitis
3PL.	bíant	bendíant	dromíant

以下、それぞれの語尾の形成過程とその特徴について述べる。

- (a) 単数と 3 人称複数: 母音連続 ia に含まれる a は消失しない。これらの語尾はいずれも次末音節アクセント語であり、語末音節アクセントになるのを避けるために a は消失しなかったと考えられる。同様に、3.1.1. で示した古カンピダーノ方言の 1SG. -ea でもすべての例で母音連続 ea の a は保存されている。

(b) 1・2 人称複数: 母音間の b の消失によって生じた ea に含まれる a の消失が観察される。

3.1.3. で述べたように、カンピダーノ方言における母音連続ではアクセントのある母音が保存され、アクセントのない母音が消失する。したがって 1・2 人称複数では、アクセントが a から e に移動したと推定できる: 1PL. -EBĀMUS > *-éamus > -émus, 2PL. -ĒBĀTIS > *-éais → -éstis¹². 同様のアクセント移動は、スペイン語にも観察される (Penny 1991: 167-168): 1PL. DĒBĒBĀMUS > debíamos, 2PL. DĒBĒBĀTIS > debíais ‘must’.

4. まとめ

本研究では、サルデーニャ語カンピダーノ方言の第 2・第 3 変化動詞の直説法半過去語尾の形成過程について考察をおこなった。古カンピダーノ方言では、ia を含むタイプの存在によって、第 2 変化動詞と第 3 変化動詞の合流がすでに生じていたことを明らかにした。また母音連続 ea の a が消失したタイプは、語末添加母音が付加されていることについて、アクセント位置との関連から説明を与えた。

現代カンピダーノ方言では、単数と 3 人称複数では ia を含むタイプが、1・2 人称複数では母音連続 ea の a が消失したタイプが継承されていることを示した。それぞれの人称語尾をラテン語にまでさかのぼると、単数と 3 人称複数ではラテン語の第 II・第 III 変化動詞、および第 IV 変化動詞のいずれかに由来し、1・2 人称複数では第 II 変化動詞に由来するといえる。各人称語尾におけるラテン語の由来を図式化すると、以下のようになる。

			第 II・第 III 変化動詞	第 IV 変化動詞
1SG.	-ia	←	-ĒBAM	-ĪBAM
2SG.	-ias	←	-ĒBĀS	-ĪBĀS
3SG.	-iat	←	-ĒBAT	-ĪBAT
1PL.	-émus	←	-ĒBĀMUS	
2PL.	-éstis	←	-ĒBĀTIS	
3PL.	-íant	←	-ĒBANT	-ĪBANT

本稿では、サルデーニャ語のもうひとつの方言であるログドーロ方言における直説法半過去語尾については扱うことができなかった。両方言の比較・対照を通じ、サルデーニャ語動詞形態論の体系的解明を試みるのが今後の課題である。

注

* 本稿は、日本ロマンス語学会第 48 回大会 (2010 年 5 月 22-23 日 慶應義塾大学) における口頭発表資料に加筆、修正を施したものである。また本稿は、東京外国語大学で実施しているグローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」の支援のもと、研究成果を公表するものである。

¹ 中世サルデーニャには、Giudicato と呼ばれる 4 つの王国が存在した。カリアリ国はそのうちの 1 つで、ほかにはトッレス (Torres), ガッルーラ (Gallura), アルボレア (Arborea) がある。古サルデーニャ語文献には、Giudicato から教会に対する寄進の内容を記録したものが多く見られる。

² 古典ラテン語では語幹の直後に IE を持つ形が規範的であった: 1SG. DORMIĒBAM, 2SG. DORMIĒBAS, 3SG. DORMIĒBAT ecc. しかし古典ラテン語の段階ですでに I を持つ形式と共存していたという (Väänänen 1981: 138)。ロマンス諸語では I を持つ形式が継承され、IE を持つ形式の痕跡はない。したがって本稿では I を持つ語尾を示す。

³ 第 1 変化動詞については、ラテン語の第 I 変化動詞から母音間の b の消失によって規則的に導くことができる: 1SG. naraa (16) 'say' < NARRĀBAM, 3SG. gitaat (14, 16) 'belong' < JECTĀBAT, 1PL. kertaamus (13) 'litigate' < CERTĀBĀMUS, 3PL. naraant (16, 17) 'say' < NARRĀBANT.

⁴ 本稿では、CV に現れるテキストおよび語形を引用する場合、当該例が現れる CV の節番号を付す。番号の後ろのローマ数字は、同一節内に現れる回数を示す。

⁵ 直説法半過去語尾における b の消失は、語幹に唇音を持つ動詞における異化によって生じ、次いで語根に唇音を持たない動詞に広がったと考えるのが一般的である (Lausberg 1966: 335-336)。

⁶ 条件を整えば、再帰的に異化が適用される例として、グラスマンの法則がある: 印欧祖語 *bhebhwdhe > *bebhwdhe > サンスクリット bubōdha 'was awake' (Hock 1991: 111)。

⁷ VENIRE はラテン語において第 IV 変化動詞に属していたが、サルデーニャ語では第 2 変化動詞に移行した。

⁸ CV では語末添加母音の表記について、現代サルデーニャ語に見られるような規則性は認められない。すなわち、子音で終わる語が文末に位置していなくても語末添加母音が付加されたり、逆に文末に置かれていても語末添加母音が付加されていないという例が頻繁に見られる。

⁹ サルデーニャ語は基本的にラテン語のアクセント位置を保存している (Wagner 1984: 15)。

¹⁰ このことは、語末添加母音は a の消失よりも歴史的に早い段階で付加されたことを意味する。この見方は語末添加母音の音色が a であることから支持される。語末添加母音 a は直前の音節の母音が a のときのみ付加されるからである。第 2 変化動詞の直説法半過去語尾における語末添加母音の性質については Kanazawa (2010) により詳しい論考がある。

¹¹ 2 人称複数では、完了からの類推が見られる (Wagner 1938-1939: 4-5)。

¹² 古カンピダーノ方言では 1・2 人称複数の用例は観察されないので推測の域を出ないが、これらの人称でも ea に含まれる a が消失したタイプと、ia を含むタイプが共存していたと考えられる。

略号一覧

DAT. = 与格, IMPF. = 半過去, IND. = 直説法, INF. = 不定詞, SG. = 単数, PF. = 完了, PL. = 複数, PPASS. = 過去分詞, REL. = 関係詞, RIFL. = 再帰代名詞, 1-3 = 人称

参考文献

Atzori, M. T. 1953. *Glossario di sardo antico* (GSA). Parma: Scuola tipografica benedettina.

Blasco Ferrer, E. 1984. *Storia linguistica della Sardegna*. Tübingen: Max Niemeyer.

- . 1994. *Ello Ellus. Grammatica sarda*. Nuoro: Poliedoro edizioni.
- Bybee, J. 2005. “Mechanisms of Change in Grammaticalization: The Role of Frequency” in Joseph, B. D. / R. D. Janda (eds.) 2005. 602-623.
- Corda, F. 1989. *Saggio di grammatica campidanese*. Sala Bolognese: Arnaldo Forni Editore.
- Guarnerio, P. E. 1906. “L’antico campidanese dei sec. XI-XIII secondo <Le antiche carte volgari dell’archivio arcivescovile di Cagliari>” in *Studi romanzi* IV. 189-259.
- Hock, H. H. 1991. *Principles of Historical Linguistics*. 2nd Edition. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Joseph, B. D. / R. D. Janda (eds.) 2005. *The Handbook of Historical Linguistics*. Oxford: Blackwell.
- Kanazawa, Y. 2010. “Sulla vocale epitetica dell’indicativo imperfetto della 2^a coniugazione nel sardo antico” 26è Congrès International de Linguística i Filologia Romàniques 発表資料.
- 金澤 雄介 2011. 『サルデーニャ語動詞形態論の通時的研究』京都：松香堂.
- Lausberg, H. 1966. *Lingüística románica II. Morfología*. Madrid: Gredos.
- Penny, R. 1991. *A History of the Spanish Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Solmi, A. 1905. “Le carte volgari dell’archivio arcivescovile di Cagliari. Testi Campidanesi dei secoli XI=XIII.” in *Archivio storico italiano* V: 35. 277-330.
- Väänänen, V. 1981³. *Introduction au latin vulgaire*. Paris: Klincksieck.
- Virdis, M. 1978. *Fonetica del dialetto sardo campidanese*. Cagliari: Edizioni della Torre.
- Wagner, M. L. 1938-1939. “Flessione nominale e verbale del sardo antico e moderno” in *Italia dialettale* XIV. 93-170, XV. 1-30.
- . 1960-1964. *Dizionario etimologico sardo (DES)*. Heidelberg: Carl Winter.
- . 1984. *Fonetica storica del sardo. Introduzione, traduzione, e appendice di Giulio Paulis*. Cagliari: Gianni Trois. (*Historische Lautlehre des Sardischen*. Halle: Max Niemeyer 1941. の Paulis による翻訳)